

2022年10月30日（日）主日朝礼拝説教

『異なるイエス？』 井上隆晶牧師

コリントの信徒への手紙二 11章1～8節、マタイ福音書 7章15～20節

①【違った福音・ほかの福音？】

新約聖書で、手紙が送られた教会の背景には、いろんな「異端的教え」があったことが分かっています。コリント教会とガラテヤ教会を見ましょう。コリント教会はギリシャにある教会です。ガラテヤ教会は小アジア、今のトルコにある教会です。場所は違うのですが、違った「異端的教え」が入り込んできました。手紙は両方とも50年代に書かれていますから、イエス様が亡くなって20年くらいして既におかしな教えが教会に入って来たことが分かります。教会の歴史というのは異端との戦いでした。けっこう信徒さんはのん気なのですが、異端の教えを聞き続けると、救いの考え方が変わってしまい、その行動がおかしくなってきた、ついには悪い実を結んでしまいます。悪い木は悪い実を結ぶからです。

今日読んだコリント書でパウロは「あなたがたは誰かがやってきて私たちが宣べ伝えたのとは異なったイエスを宣べ伝えても、あるいは、自分たちが受けたことのない違った霊や、受け入れたことのない違った福音を受けることになっても、よく我慢しているからです。」(Ⅱコリント 11:4)と語って、コリント教会を非難しています。「異なったイエス」「違った霊(悪霊)」「違った福音」と三つ並べていますが、これは偽教師たちが持ち込んだものでした。彼らのことを皮肉たっぷりに「大使徒、偽使徒、ずるがしこい働き手、サタンに仕える者」と呼んでいます。ここで言われている「違った福音」とは、「キリストによって救われたのだから律法を守らなくて良い」という福音理解です。コリント教会のある信者たちは「私にはすべてのことが許されている」(Ⅰコリント 6:12)と言い合っていました。これは現代でも救い派、グッドニュース宣教会という名前が出てきているのは以前お話ししました。異端的思想は繰り返すのです。しかしイエス様はそのようには教えられませんでした。「律法の一点一画も消え去ることはない。これらの最も小さな掟を一つでも破り、そうするようにと教える者は、天の国で最も小さい者と呼ばれる。」(マタイ 5:18～19)パウロの話は前半は教理ですが、後半は正しい世活を行うように語っています。

さて、これによく似たことがガラテヤ書に出てきます。「あなたがたがこんなにも早く離れて、ほかの福音に乗り換えようとしていることに、わたしはあきれ果てています。ほかの福音といっても、もう一つ別の福音があるわけではなく、ある人々があなたがたを惑わし、キリストの福音を覆そうとしているにすぎないのです。…反する福音を告げ知らせようとするならば、呪われるがよい。」(ガラテヤ 1:6～8)ここでは「呪われるがよい」という呪詛文が9節にも繰り返されています。ここで言われている「ほかの福音」というのは、今まで通りユダヤ教の習慣を守

り、割礼を受けなければ救われないという福音理解です。ユダヤ教から、なかなか離れられないのです。キリストを信じるだけでは駄目だと教えたのです。こうしてみると、一方では律法を守るように語り、もう一方ではキリストの業に頼るように語っています。パウロは、バランスを持ってと言っているのです。信仰とはバランスです。バランスを失うと自転車も転びます。信仰も同じなのです。キリスト教はユダヤ教から始まりました。だからどうしてもユダヤ教に戻ろうとする運動と、ユダヤ教から離れようとするヘレニズム（ギリシャ・ローマ文化）運動の二つの間を揺れ動くのです。私たちはキリストによってのみ救われます。決して私たちの力や業ではありません。これは間違えてはなりません。しかし私たちは十戒を守らなければなりません。それは人間の力で守るのではなく、キリストに頼り、聖霊の力で守らせてもらうのです。守れなくても裁かれませんが、守る努力をしなければなりません。だからキリストに対する信仰と、キリストの助けによるみ言葉の実践のバランスが必要なのです。

②【異なったイエス】

もう一つは「異なったイエス」の思想の氾濫です。イエス様とは一体誰なのか？人間なのか、神なのか、それとも天使なのか、または別の被造物なのか？という議論が教会に起ります。それがヨハネの福音書や手紙の背景にあります。ヨハネはエフェソ教会を牧会していました。彼の書いた手紙はこのように始まります。

「初めからあったもの、わたしたちが聞いたもの、目で見えたもの、よく見て、手で触れたものを伝えます。すなわち、命の言について。この命は現れました。御父と共にあったが、私たちに現れたこの永遠の命を、私たちは見て、あなたがたに証しし、伝えるのです。」（Iヨハネ 1：1～2）エフェソ教会では、キリストは霊体であって、肉体は持っていなかった、という思想が入ってきました。神は汚れた人間の肉などにはならないという考え方で、「仮現論」といいます。そこでヨハネは「私はこの目で見だし、手で触った」と証言したのです。今でもいろんな「異なったイエス」が出てきています。エホバの証人は、キリストは神ではなく天使ミカエルと同じような造られた天使だといっています。統一協会もキリストは神ではなく、神の創造の目的を完成した人間であるといっています。ユダヤ教もイスラム教もイエス様をメシアと信じていますが、それは単なる人間です。キリスト教だけがキリストは神であり、被造物ではないと宣言します。それがユダヤ教と決定的に別れた理由でした。しかし今のキリスト教会の中にも「異なったイエス」を主張する人たちがいます。

先ほどユダヤ教に戻ろうとする運動と、ユダヤ教から離れようとする運動の二つがあるという話をしました。ユダヤ教に戻ろうとする運動は、ただ一人の神を主張しました。モナルキア運動といっています。モノとは「一」という意味です。そこから唯一の神が、ある時は父に、ある時は御子キリストに、ある時は聖霊に変身した、という教えが出ました。教会はその教えを異端としました。その逆でユダ

ヤ教から離れようとする運動は多神教になります。また 2 世紀にマルキオンという人はユダヤ的なものを排除してルカ福音書と、パウロの手紙だけを正典と決めました。そこで教会は会議を開き、新約聖書 27 巻を正典と制定しました。

教会はこの一と三のバランスをとったのです。聖書を読む限り、父とキリストと聖霊は神であり、しかし三人の神ではなく一つの神（三位一体）としか告白できないというのです。またキリストは完全な神であり、同時に完全な人であるというバランスで見ようとしたのです。このバランスで聖書を読むとイエス様が語ったことや行ったことが実によく分かります。これが聖書を読む秘訣・鍵です。単なる人間イエスとして読むと、聖書は分からなくなります。神が人になるということの本気で信じてみてください。見方が変わると思います。

③【神様についての事だけは妥協してはいけない】

パウロという人は福音を伝える態度は非常に柔軟でした。誰に対してもその人に合わせ、その人のようになって福音を伝えました。しかし、いざ福音の内容やキリストについて変えられそうになると断固として抵抗しました。

●近畿宗教連盟の総会で天理市にある本殿に行った時の事です。天理教の教会長さんが境内を案内してくれました。建物の中心にある場所に案内され、「ここはジバとって、人類発祥の地です。世界はここから始まりました。皆さん、拝礼してください。」と言われたのです。私の周りにいた仏教のお坊さんや、神社の宮司さんは一斉にひれ伏しました。キリスト教は私一人だけでしたが、私はどうしても拝礼できませんでした。拝礼するという事は、天理教の教えを受け入れるということになり、それは聖書の教えと反することです。私の中の霊がそれをさせませんでした。古代のクリスチャンたちは当時の支配者やその家族の為に祈り、世の中に従順に従いましたが、いざ皇帝に香を炊き、彼を拝めと言われた時は断固として抵抗し、殉教していきました。戦時中のホーリネスの牧師たちも天皇のためには祈りましたが、その写真に頭を下げ、礼拝することはしませんでした。だから弾圧され、殉教しました。そうせざるを得なかったのです。

パウロは手紙の中で「わたしはあなたがたを純潔な処女として一人の夫と婚約させた、つまりキリストに献げたからです。ただ…あなたがたの思いが汚されて、キリストに対する真心と純潔とからそれてしまうのではないかと心配しています。」(II コリント 11 : 2~3) と書きましたが、キリストは私たちの夫のようなものです。他の神々を拝むことは、夫を裏切ることになります。それだけは決して出来ません。

●4世紀にアレキサンドリア（エジプト）のアタナシウスという人がいました。アタナシウスは「正統信仰の父」と呼ばれています。当時アリウスという人がいました。彼はとても敬虔な人でしたが、キリストの事を「半分神で半分人間だ」といいました。それに対してアタナシウスは「半分神のようなものは神ではなく、半分人間のようなものは人間ではない。完全な神だからこそ人を救うことが出来るのだし、完全な人

間だからこそ私たちも模範となれるのだ」といってその考えを譲りませんでした。ニカイア会議の時、二千人ほどが集まりましたが、アタナシウス派は三分の一しかいませんでした。この少数派のために祈っていたのが最初の修道者アントニウスです。そしてついに、アタナシウス派が正統信仰と認められたのです。

パウロは「わたしが告げ知らせた福音は、人によるものではありません。私はこの福音を…イエス・キリストの啓示によって知らされたのです。」(ガラテヤ1:11~12) といっ、この教えは人間が考え出したものではなく、天から、神から来たものだと言っています。だからこそパウロは命を賭けたのです。命を賭けたからこそ、子孫に伝わったのです。命を賭けなければ本物ではないと思います。教会は命がけでキリストの聖体を食べ、信仰を守ってきたのです。私たちもこの福音を命がけで信じ、伝えてゆきたいと思います。